



Via Latina 22

2026 年 8 月 357 号

総本部よりのお知らせ－マリア会

内 容

コンゴ特別地区での初誓願式	1
ラテンアメリカ：年次 CLAMAR 会議と修練期養成の評価	2
スペイン、ベリスで 2026 年 Horizons プログラムの開催	4
謙遜な人、シャミナード	5
第 9 回信徒マリアニスト共同体国際会議	10
被造物を大切にするための世界祈りの日	10

コンゴ特別地区での初誓願式

2026 年 6 月 27 日、土曜日、マリア会はコートジボアール、アビジャン・ドームの柱の聖母修練院において恵の 1 日を過しました。

コンゴ特別地区のレミー・カレカ・ムニョカ士とセス・ンドウンビ・ムウィンペ士が初誓願を宣立し、福者ギョーム・ジョゼフ・シャミナードのカリスマによってキリストに従うことを誓約しました。彼らの同僚、マリアニスト家族のメンバー、そして多くの信徒たちに見守られ、二人はマリア会においてその生涯を主に奉獻するという望みを表明しました。

この祝典は、主がご自分への奉仕に若者を召し続けておられることを私たちに気づかせ、またマリアニスト召命の活力を示しています。



共同司式司祭と会員たちに囲まれているレミー士とセス士（中央）

セス・ンドゥム・ムウィンペは、1999年2月16日、RDC-キンシャサでカトリック家族の中に生まれました。彼は、数年前に信徒マリアニスト共同体に場所を提供している小教区にいた教区司祭を通して、2020年マリアニスト修道者のことを知るようになりました。2023～2024年にかけて、彼はキンシャサで志願期を過ごし、2024年から2026年にアビジャンで修練期を過ごしました。

レミー・カレカ・ムニョカは、2000年4月30日、RDC-ムブジマイでカトリック家族の中に生まれました。彼は2020年キンシャサに来ました。彼は一人の知人を介してマリアニスト修道者を知るようになりました。2023～2024年にかけて、彼はキンシャサで志願期を過ごし、そして2024年から2026年にアビジャンで修練期を過ごしました。

教会の母なるマリアが、私たちの兄弟、レミー士とセス士の奉献と宣教の旅路において、彼らに同伴してくださいますように。

ラテンアメリカ：年次 CLAMAR 会議と修練期養成の評価

7月9-10日、ラテンアメリカゾーン（CLAMAR）の会議がアルゼンチン、ブエノス・アイレスにて議長、ロヘリオ・ヌニェス士（ES-ブラジル）の進行役の下に行われました。会議の出席者は、ラテンアメリカ地区長、マウリシオ・シルバ士（LA-チリ）と他の特別区の調整役、ハビエル・デ・アギーレ神父（LA-アルゼンチン）、ビクター・ミュラー神父（LA-ペルー）そしてヘスス・アントニオ・オバンド神父（LA-コロンビア・エクスアドル）でした。そしてまた、メキシコとプエルトリコを代表してレイナルド・ベリオス士（米国）、そしてまた総本部霊生局長、パブロ・ランボー神父が出席しました。キューバからの代表者は出席出来ませんでした。



CLAMARの会議 左から：ハビエル・デ・アギーレ神父(LA-アルゼンチン)、マウリシオ・シルバス(LA-チリ、地区長)、パブロ・ランボー神父(GA)、ビクター・ミュラー神父(LA-ペルー)、ロハリオ・ヌニェス士(ES-ブラジル、CLAMAR会長)、レイナルド・ベリオス士(米国)、ヘスス・アントニオ・オバンド神父(LA-コロンビア・エクアドル)

会議は、それぞれの特別区の現状についての幅広い分かち合いから始まりました。会議の次の部分は、ゾーン全体に共通する現実、特に、その全ての活動と提案を伴う「教育ネットワーク」(CLAMARED)についての考察に注力することでした。CLAMAREDの次の重要な活動は、今年9月末にブラジル、バウルで行われる、若者の司牧に献身する教育活動の代表者が共に集う会議です。

さらに、ラテンアメリカ、ボランチア活動(VLM)とラテンアメリカマリアニスト養成センター(CELAFOM)の活動の検証に時間が宛てられました。

初日、7月9日はアルゼンチンの独立記念日だったので、お祝いの会議、ミサ、そしてバーベキューの昼食があり、これにアルゼンチンの全マリアニスト修道者、そして多くのマリアニスト学校の幹部たち、そして信徒共同体のメンバーが出席しました。



ルハンの聖母マリア聖堂でのミサ

CLAMAR 会議の後、7月11日と12日の二日間は初期養成のプログラムに宛てられました。3年間、ラテンアメリカ地区とスペイン管区はエル・カヤオ(ペルー)の修練院で修練者の養成を行ってきました。この3年間の評価のため、ラテンアメリカ地区評議員メンバー、スペイン管区長イニャキ・サラスア神父、および修練院の2名の養成者、カルロス・フリオ・バラガン神父(LA-コロンビア・エクアドル)とホセ・ピセンテ・ロペス(ES)神父が集ま

りました。また、この会議にパブロ・ランボー神父とラテンアメリカ地区から他2名のメンバー、ヤーニルトン・マトウラナ士（LA-コロンビア・エクアドル）とダニエル・オレリャナ士（LA-チリ）も出席しました。

11日、土曜日午後、グループ全員で、パブロ・ランボー神父の司式するミサの祭儀に与かるためルハンの母マリア聖地に集まりました。

スペイン、ベリスで 2026 年 Horizons プログラムの開催

2026 年 Horizons プログラムは、7 か国から 22 名の参加者を得て、2026 年 7 月 4 日～30 日にスペイン、ベリスにある「バルメサバル・スピリチュアリティの家」で開催されました。このプログラムは 1 か月に渡る養成体験を目指しています。参加者の打ち分けはマリア会メンバー15名と FMI から7名です。



プログラムのテーマは“心の道”：知ること、愛すること、そして奉仕すること”でした。この1か月の中心となる問いかけは：“なぜ私はマリアニスト修道生活に身を置いているのか？”でした。このプログラムのセッションでは様々なテーマが取り扱われましたが、その内容は、召命の歩み、修道誓願、多文化共同体の生活と世代間共同体の生活、祈り、宣教、セルフ・ケア、バーンアウト（燃え尽き症候群）、リーダーシップ（指導力）、そして個人的刷新などでした。

プログラムとしては、毎日の祈り、沈黙、個人的考察、少人数での分かち合い、そして共同体としての対話などがありました。巡礼とマリアニスト遺産もまた、このホリゾンの体験の重要な要素でした。7月13日、参加者はサラゴサの柱の聖母大聖堂を訪問しました（[ビデオを見るのにクリックしてください](#)）。7月24日から28日に、グループはボルドー、アジャン、ペリグーを含むフランスのマリアニストの遺産地区への巡礼を行いました。これら訪問は参加者にとって、自分たちの個人的召命の歩みをマリアニスト家族の幅広い歴史と宣教に繋げる助けとなりました。

Horizons プログラムが最終段階に入ると、参加者は今回の総括と、共同体生活と宣教活

動へ戻る準備に専念しました。彼らはこの一ヶ月の経験を振り返り、自分たちの誓願について考察し、このプログラム研修で得た洞察をどう進めていくか識別しました。



左から：エピファニー・コイエ(FMI-トーゴ)、バラ・スワミ・アラヴァラ(インド)、デニス・ポロン(FMI-ブラジル)、アツェ・シャルル・ブノワ・ディアンブラ(コートジボワール)、ギルデテ・マリア・ドス・サントス(FMI-ブラジル)、ジョージ・ハンス(インド)、アンナ・セクンダ・ホロ(FMI-インド)、シムチャ・デイビッド・ボコマ(トーゴ)、グロリア・エルビラ・パス(FMI-ブラジル)、ジョン・ポール・ラーズ・ルドゥサミ(インド)

Horizons プログラムは7月30日のミサをもって終了しましたが、このミサの中で参加者は自分たちの誓願を更新しました。このミサは、プログラムの正式な終了と、参加者が自分たちの国、共同体、および宣教活動に戻るのを、刷新された参加者をマリアニストの生活と宣教へと送り出すことを示すことになりました。

謙遜な人、シャミナード

謙遜は枢要徳（知恵、正義、勇気、節制）ではなく、それほど重要でない徳と言われます。しかし、これは事実ではありません。謙遜は主キリストの資質であり、彼は「私の心は柔和で謙遜である」と啓示しており、弟子たちが自分に学ぶよう勧めています。「カトリック教会のカテキズム」は謙遜を、私たちの肉と死の抱える弱さを引き受けられた永遠なる神のみことばの資質として示しています（No. 552, 559, 724, 2612）。実際に、イエスは貧しく誕生され、ガリラヤの農民たちの間で質素に貧しく生活されました。これら貧しい人々に彼は神の国を宣べ伝え、悪魔の支配から彼らを解放し、彼らの病を癒されました。最後に、彼は貧しく、打ち捨てられて死にました。それゆえ、謙遜はキリストの弟子の固有の資質なのです。

謙遜の本質は、物質的財、権力、他者への優越感に執着する自分自身に重点を置く、利己的な自己に打ち克つことにあります。荒れ野の試みにおいて、悪魔はイエスに世界のすべての国々を示し、次のように言いました、「この国々の一切の権力と栄華とをあなたに与えよう。それは私に任されていて、これと思う人に与えることができるからだ。だから、もし私を拝むなら、全部あなたのものになる」（ルカ 4・5 - 6）。洗礼者ヨハネは「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」（ヨハネ 3・30）と認めています。アビラの聖テレジアは謙遜

を、「真理のうちに歩むこと」、すなわち、神のみ前で私たちはどのような存在なのかという真理のうちに歩むことである、と教えました。それゆえ、謙遜は高慢、傲慢、尊大の反対です。



この小さいが偉大な徳はシャミナード神父を見事に説明していますが、彼はサンクロードの司教、ド・シャモン司教の前で次のように認めています：「司教様、どうか遠慮なく私に関してお気づきになったことを仰ってください。私には信仰の助けによると思えるのですが、私たちの主の言葉、《よくよく言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ・・・》（ヨハネ 12・24）を私は少しは理解していると思います。もし私が自分に対して完全に死ななければ、もし私が深く謙ることなく、また全く役に立たない者として拒絶されないなら、マリア会はどのようにして継続し、成長するでしょうか。ただ主と、その尊い御母のみ名だけが崇められますように」（1845 年 11 月 23 日）。

著者： ルイス・ロンジェド（スペイン：バレンシア）

総長シャミナード神父は、神と人々の前に、常に控えめで謙虚でした；彼は自分自身の人となりについて常に控えめで、自分自身についてあまり言及せず、自分の使徒的事業を公衆の前に宣伝するのを決して望みませんでした。カイエ神父は、シャミナード神父が「自分の人生の細部について（語ることに）非常に慎重で、それについてほとんど話すことはなかった」と言っています；そしてシュヴォ神父は同じ内容のことを、総長シャミナードは以前よく「すべての栄光は神に、そして惨めな協力者である私 たちには混乱のみ」と言っていた、と語りました。（チャールズ・ドマンジョン神父、S.M. *In Positio sobre virtudes heroicas*. 1929, p. 1006）彼は栄誉を求めて自分の司祭職を行使することはありませんでした。

とはいえ、1800 年にサラゴサの亡命から帰国し、聖座がシャミナード神父をバザス教区の管理者に任命したので、彼は聖職者としてのキャリアを築くことができました；しかし、バザス教区がボルドー大司教区に吸収合併された時、シャミナード神父は「マリアのソダリティ」の指導に全面的に専念するために、急いでダヴィオ大司教にその地位からの辞任を申し出ました。1802 年 6 月 19 日の素晴らしい手紙の中で、彼は自分の気持ちを次のように吐露しています：「わずか 18 ヶ月前のことでありますが、オーシュの大司教様がいわば無理にでもと、私にこの教区の管理を引き受けさせようとなさいました。私は、大司教様に対する敬愛の念から、またそれ以上に、神によって吹き込まれた教会に対する愛によって、大司教様の切なる勧告に屈して、ボルドー市の司牧的状況とその打ち捨てられた状況、特に若者が打ち捨てられていることが私に要求する多くの仕事に、この困難な任務を加えました。」

シャミナード神父は傲慢な人ではなく、横暴な人でもありませんでした。彼は決して自分のことを創立した事業体のオーナーであるとは思っておらず、むしろそれらを創立し、統治するための神の道具と思っていました。ですから、彼は弟子たちに助けられたのです。シャミナード神父はソダリティの指導者ではありましたが、ソダリティのトップには信徒の指導者がいました。シャミナード神父は自分が作り、組織した煙突掃除人の仕事の指導を、若いソダリストで弟子であるデュブシュに委ねました。汚れなきマリア修道会の会則の起草は、彼の秘書、デイビッド・モニエに委ねられました。彼はまたサン・レミの広大な地所の購入の調査の仕事もモニエに任せました。同じく、マリア会の公的承認のための政府との非常に重要な交渉においては、カイエ神父を自分の代理に立てました。

自分自身に対して謙虚だったので他者に尊敬の念をもって接したシャミナード神父は、自分の事業を自慢すること、あるいはその事業の成功を自分のものとすることはありませんでした；むしろ、彼はその成功を神のお陰であると考えます。ある親戚に宛てた手紙の中で、総長シャミナードは、その成功は自分の個人的な資質に起因するのではなく、「自分がみ摂理を識別することができる時は」（1823年4月19日）、その導きなしにはどんな事業にも着手しなかったという事実に起因するということをその人に知らせています。彼の謙遜のもう一つの例は、1819年の聖座への嘆願の中で、モンシニョール・ダヴィオーがシャミナード神父を「ソダリティの思慮深い指導者」と説明しながら書いた序文のメモの中に見ることができます。シャミナード神父が嘆願書について作成した登記には、彼は注意深く「思慮深い」という修飾語を削除しています（アンリ・ルソー神父、S.M. *In Positio sobre virtudes heroicas*. 1929年、p. 998）。シャミナード神父は若くて少しうぬぼれているラランと多くの神学的議論をしましたが、その議論において、彼は自分の弟子の傲慢さを辛抱強く忍耐しています；1830年11月16日付の手紙で弟子に宛てて次のように書いています：「あなたは、私がしなければならないと信じてあなたにおこなった注意について、私に反省を促しました。感謝します。私は自分に多くの欠点・・・があることを分かっています；今日、改めてそのことを自覚しました」。

同じ心情は1845年2月26日付の教皇グレゴリオ16世への覚書に表現されていますが、その時、彼は次のように告白しています：「聖下の不肖の子は、確かに自然的な弱さと欠点だらけで、人間的に言えば、神によって召された偉大な事業に不向きでありましょう」。彼はサンクロードの司教、シャモン司教に次のように認めています：「嗚呼、司教様、人生の絶頂期に私は何もできませんでした、そしてとりわけ現在は何もできません；私は神の恵みを必要としています。神は強い者を恥じ入らせるために、世の弱い者を選ばれました」（1847年9月25日）。彼の言葉から、私たちは彼が自分の創立したものを自慢していなかったことを理解します；彼はそれらの事業を神様の事業であると考えましたし、不十分な事業、それほど重要ではない事業と理解しています。彼はマリア会をいつも「小さな会」と呼び、会則の第一条にそのように記しています：「マリアの保護の下に、神と教会にその貧しい奉仕を

捧げる小なるマリア会」。しかし、自慢せず、謙虚ではあるが、彼はその行動においては臆病ではありませんでした。総長シャミナードは、「勇気は謙遜と対立するものではなく、また謙遜は勇気と対立するものではない」とよく繰り返していました（ドミニク・クルーゼ士への1831年7月19日の手紙）。このような訳で、彼は揺るぎない決意をもってその事業に取り組みました：「私たちの保護者である尊い御母の保護の下にあって、私たちにできないことが何かあるでしょうか」（1834年1月4日付回章）。



2000年9月4日、シャミナード神父の列福式の感謝ミサのあと
聖パウロ大聖堂のアトリウムで、アルゼンチンの巡礼者たちとアグスティン・コルテス司教と共に

非常にセンシティブな良心を持つシャミナード神父は、その個人的な罪と限界をよく認識していました。多くの功績に満ち、キリスト教の善に捧げられた全生涯の後に、彼は1834年の手紙でレオン・メイヤー神父に次のように書きました：「もしあなたが私の年齢（当時73歳）に達することができたら、その時は、私のように神への奉仕に最善を尽くせなかったと悔やむことのないようにしてください」。自分は不十分であるとのこのような感覚は年を追って大きくなっていきました；生涯を終えるころ、ついに次のように言うまでになりました：「まったく人をうんざりさせるこの老いぼれの欠点と、カイエ神父、クルーゼ士、ルーセル神父の才能、活力、気品の間には何と大きな違いがあることでしょう！（1847年4月9日 ドネ大司教宛）。1844年10月12日のレオン・メイヤー神父への手紙では次のように言っています：「嗚呼、私は多くの欠点を持ち、多くの不忠実を犯しました：私の良心の眼はあまりにも曇っています！親愛なるわが子よ、自分自身を救うために祈りを必要としている私のために祈ってください」。

福者シャミナード神父の謙遜はその行動に現れています；例えば、ジェラルド・シルヴァン神父は次のように証言しています：「総長シャミナード神父がボルドーに来て、会則の新しい草案についての講話を修練者と各共同体のメンバーにした時、この草案作成の仕事に意見を求められなかったので機嫌が悪かったコリノー神父は、総長が講話中であったにもかかわらず割り込み、皆の前で真っ向から反対の意見を述べるということをしてしまいました。

総長シャミナード神父は、自分に向けられるはずの尊敬のこれほどの信じられない欠落に、彼がどれほど影響を受けたか感じさせるたった一言、たった一つのジェスチャーも私たちに推測させることなく、最高の謙遜を実践して、いつもの落ち着きを保ちました [ミゲル・ガルシア士、S.M. *In Positio sobre virtudes heroicas*. 1929、p. 993]。しかしシャミナード神父は、総長としての自分の義務と謙遜の徳を調和させる方法を知っていました。もし彼が、一方では自分の能力の不適切さと個人的無能力さを感じており、他方で総長としての自分の使命と権威を認めていたとしても、1846年4月18日付のド・シャモン司教宛の手紙でつぎのように書いています；「私が創立者であるのは、ただイエス・キリストがこれをお求めになったからであり、私のこの確信は地上におけるイエス・キリストの代理者である教皇によって承認を受けています」。ララン神父に彼は赤面することなく次のように示しています；「私がマリア会を大事にするのは、ただ、それを神のみ業と考えるからです。私は会を統治するためには、自分を最も無能な者と思っています。しかし、主が私の光、私の支えです」（1835年10月10日 ララン神父宛）。

シャミナード神父の謙遜の最も優れた証しは、総長としての辞任後、彼の評議員たちとの屈辱、苦渋、非難にまみれた様々な軋轢の間になされました；彼は司教たちの前に中傷され、また聖座に対する抵抗の罪で非難されました。けれども、彼は落胆を感じることなく、内的静穏さと何らかの霊的慰めすら保ちました。それは、彼の次のような手紙に現れています；「もし評議員たちとの軋轢の最後が私に屈辱を与えることになるとしても、天国のため、私の罪の償いのために、何かを得るものとなっていることを私は希望します」。「十字架にかけられた聖なる方の愛の故に、人間の考え方に従って屈辱を受け、完全に敗北して死ぬのは何たる幸いでしょうか！」（1844年9月の手紙）。事実、彼は評議員たちの要求によって総長職を辞任するというこれ以上ない謙遜の行為をしたのです；そして、もし総長シャミナードがその修道者に対する権威を主張したとすれば、それは自分の辞任後、マリア会が転落することになる会則に対する乱用と失政に終止符を打つことでした；そしてこのことは、創立者としての彼の資質、および、彼が創立の精神の保証人であったが故でした。なぜなら、もしこの葛藤が彼の人となりについてのことであつたとすれば、「私はイエス・キリストに似るために自発的に沈黙を守る」ことを彼は認めているからです；しかし、「マリア会の創立者である私が反逆者とみられるというスキャンダルを引き起こし、私が創立したものを失わせることは許されません」。この件に関して、1845年2月26日に教皇に次のように書いています；「聖下、残る寿命もわずかな（当時83歳）聖下の不肖の子は、長い間の重責に疲労し、苦痛を抱きながらも、ただ、間もなく取り除かれることを期待して重荷を担ってまいりました。それがどうして、執着と野心によっていまだにこれを求め続けていると想像できるのでしょうか」。そして、ボルドーの大司教には次のように書いています；「もし自分の立場で私に言い過ぎがございましたら平にご容赦くださいますように。事実、私は誤りやすい者、しかも恐らくは、他のすべての者よりも誤りやすい者であると存じております」（1844年9月24日付の手紙）。

第 9 回信徒マリアニスト共同体国際会議

8月17日から22日にかけて、コロンビア、ボゴタで、第9回マリアニスト信徒共同体国際会議が開催されました。次が CLM 議長、ボリス・ジャンバンコ氏の言葉です：“この集まりは、私たちの兄弟的絆を強め、体験を共有し、そしてマリアニストの使命への私たちの誓約を更新するこの上なく貴重な機会を提供します。「マリアとの契約において、イエスに召されて」とのスローガンの下に、私たちは、この集まりの間に、私たちはマリアニスト召命への私たちの“はい”を、つまり、最終的にはマリアに導かれてその宣教に赴くために、このマリアニストの生活において私たちがどのように生き、そして成長するかを探究します”。



マリアニスト家族の他の枝からの代表者たちもこの会議に参加しました：ボリス・ジャンバンコ氏は続けて、“会合の間、私たちは「マリアニスト・カリスマに基づく家族」のメンバーとして、教会における私たちの存在について話し合います。私たちはこれを巡って理解を深め、成長し続けるために非常に重要な時にいます”。

この集まりの1つの重要な点は、新しい国際チームメンバーを選出することであり、この国際チームがこれから数年間、マリアニスト家族のこの枝を活気づけることになります。この国際チームは、信徒共同体が存在する各大陸の代表者、および議長で構成されます。

私たちは、私たちの読者と全てのマリアニスト家族メンバーがこの会議を心に留め、この会議の成功裡の実現とその成果のために祈るよう招きます。

被造物を大切にするための世界祈りの日



2015年に全カトリック教会に向けて、教皇フランシスによって制定された“被造物を大切にする日”の今年の記念日が、9月1日に、あるいはこの日に続く週末にやってきます。2025年以来、教皇レオ16世によって公布された“被造物を大切にするためのミサ聖祭”回勅のお陰で、私たちは典礼の形式でこの大変特別な日

をお祝い出来ることになっています。

皆さんはサイト上、<https://www.worlddaycreation.com> で、この重要な日の式典の準備を助けるためのアイデアと資料を見つけられます。

最近の総本部通信

- 訃報：7－9号
- 7月10日：2026年-2027年国際名簿のための情報提供、総書記、ホセ・イグナシオ・イグレシア士から行政単位の責任者に3か国語で送付

総本部の日程

- 8月17－22：総長、アンドレ・ジョゼフ・フェティス師がコロンビア、ボゴタでの信徒マリアニスト共同体の国際会議に出席
- 9月23日－10月18日：総長評議員会がフランス地区を訪問

読者の皆様へのお知らせ:

次号の Via Latina 22 は 2026 年 10 月 1 日に発行されます。